

●書学書道史学会

会報

第47号

令和6年(2024)5月15日発行

編集・発行

書学書道史学会

広報局

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル 7F

(株) 毎日学術フォーラム内

TEL (03)6267-4550

FAX (03)6267-4555

MAIL maf-syogaku@mynavi.jp

理事長再任のご挨拶

河内 利治

東京では例年春分の頃に満開を迎える桜樹が、4月初旬に咲き誇っています。新型コロナウイルスやインフルエンザもほぼ終息に向かい、「賞桜」気分になれるのも本当に4年ぶりでしょう。新生活の開始を祝福しているかのようです。

このたび第18期理事長に再任されました。引き続き大役を務めさせていただきます。ご挨拶申し上げます。理事選挙の結果、前17期常任理事10名が揃って当選理事となりました。このことは、7局による新体制の運営をご承認くださったものと衷心より感謝申し上げます。引き続き運営するにあたり2年間の活動を概括してみます。



企画局は、「大会」と「例会」を実施しました。「大会」はいまだコロナ禍の

燦るなかでしたが、盛岡大学と春日井市道風記念館のご尽力により、対面で盛会裡に開催することができました。宮澤和樹氏と古谷稔氏の貴重な記念講演を拝聴でき、至福のひとときを過ごされた会員もいらっしやいました。新規軸の「例会」も、研究発表

と講演をZoomによるオンラインでライブ配信しました。ご視聴くださった多数の会員からご好評をいただきました。渉外局は、学会誌『書学書道史研究』のJ-STAGEへの登載・公開に加え、各種国内外の展覧会・イベント・学術会議・シンポジウムのご案内を従前に増してホームページに配信しました。情報リソースとしてご利用ください。振興局は、「研究促進助成金制度」による助成金の取得者には、「大会」での口頭発表が義務づけられていますが、「例会」にも機会を挙げました。さらに学生会員を支援するための「学生会員研究発表旅費補助制度」も新設しました。編集局は、学会誌の「投稿規定・執筆要領」の一部改定を行いました。第34号より適用されますのでホームページにてご確認ください。広報局は、年2回(1月・5月)の「会報」編集業務を各局と連携して発行しました。会計局は、学会の財務管理の一般を、事務局は学会の事務一般並びに組織及び事業の管理業務を担いました。全7局とも局長を中心に相互に連絡を取りあいながら会務を運営してまいりました。あらためて各局長と副局長並びに幹事各位に感謝申し上げます。

本学会発足から34年の間に、論文は「書く」から「打つ」に激変しました。稿者は手書き文書でないと考えられない世代に属するため、PDFファイルの山に辟易としています。中青年世代には全く苦にならないのでしょうか。生成AIが登場して一見整った例文を数秒で作成してくれる時代になったとはいえ、インシュタインの「大切なのは問うのをやめないことだ」の言葉通り、会員一人ひとりの地道な研究の歩は決して止まることはないことを確信しています。

最後に、名誉会員としてご指導をいただきました西林昭一先生、池田温先生、興膳宏先生、杉村邦彦先生がこの2年間に後を追うようにご逝去されました。誠に悲痛の極みです。斯学の礎を築いてくださった先哲の学恩に報いるためにも、会員の皆様のご支援ご協力を仰ぎながら会務を遂行してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(本会理事長)

第34回 書学書道史学会大会開催のお知らせ

企画局

今年度の書学書道史学会大会は、10月26日(土)、27日(日)の両日にわたり、大東文化大学(板橋キャンパス)において、対面方式での開催を予定しております。開催に際しては、やむを得ない事情で対面方式による参加が困難な方には、事前にお申し出いただくことで、オンラインでの参加も可能とするように対応します。大会参加費は、対面、オンラインを問わず一般会員が2,000円、学生会員は無料といたします。

詳細および参加申込については、9月下旬に「大会のしおり」として研究発表のレジュメとともにご案内を差し上げます。現時点での概要は以下のとおりです。開催方法は「大会のしおり」の発送の後にも変更する場合があります。最終的には学会ホームページでお知らせしますので、ご承知おきください。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。



10月27日(日)

大東文化大学板橋校舎多目的ホール

- 10時00分～12時00分 研究発表(3～4本程度)
- 12時00分～13時00分 記念撮影、昼食
- 13時00分～15時00分 研究発表(3～4本程度)
- 15時15分～16時30分 講演「翁方綱「孔子廟堂碑考」検証(仮)」
澤田雅弘氏(名誉会員、大東文化大学)
- 16時30分～16時40分 閉会式

※会期中に特別展示開催 於：30305室

◆大東文化大学(板橋キャンパス)へのアクセス

- 都営地下鉄三田線「西台駅」西口下車、徒歩約9分
- 東武東上線「東武練馬駅」北口・東口下車、無料スクールバスで約7分

◆宿泊施設について

役員、会員ともに各自で手配願います。

第34回 書学書道史学会大会研究発表者募集要項 企画局

今年度の書学書道史学会大会は、上記のとおり開催いたします。会員各位には、日頃の研究成果を意欲的かつ積極的に発表いただきたく、左記の要領で募集します。

記

◆理事会

10月26日(土)

11時00分～ 大東文化大学板橋校舎30321室

◆大会

10月26日(土)

12時00分～ 受付開始

大東文化大学板橋校舎多目的ホール

開会式、総会

13時00分～14時00分 研究発表(2本程度)

14時00分～15時00分 シンポジウム「書の人文情報学(仮)」

15時15分～17時00分 中村寛氏(会員、東京大学)

成田健太郎氏(会員、京都大学)

藤森大雅氏(会員、大東文化大学)

17時30分～19時30分 懇親会 於：生協食堂

①開催日/方法：10月26日(土)、27日(日)/対面での発表を原則としますが、オンラインによる参加会員のために、電子データをご提供いただく場合がありますので、ご承知おきください。

②発表時間：各30分(発表20分、質疑応答10分)

③申込方法：Eメールにて、左記お問い合わせ先までお申し込みください。件名には必ず「書学書道史学会大会発表申込(※発表希望者氏名を付す)」と明記してください。また本文の冒頭に「所属・氏名・連絡先」を記したのちに、発表内容の題目および発表内容の要旨をレジュメ(800字程度)にまとめてご提出ください。

- ④レジュメ：原則として、ワープロ（テキスト形式、Wordファイル形式のいずれか）で作成し、申込時のEメールに、ファイルを添付して送信してください。
- ⑤申込締切：6月30日（日）必着
- ⑥発表者の決定と連絡：7月7日（日）開催予定の常任理事会にて協議・決定し、採否の結果は個別に連絡いたします。
- ⑦レジュメ集の公開：上記の「大会のしおり」（9月下旬配付）には、研究発表レジュメ集を添える予定です。この内容はホームページにも掲出いたします。
- ⑧学生大会研究発表旅費補助制度
- 今回の大会より、本学会の大会等に対面参加して研究発表を行う学生会員に対して必要な旅費を補助します。旅費補助を希望する学生会員は、ホームページの「学生会員研究発表旅費補助制度規程」をよく読んで、学生会員研究発表旅費補助申請書」をダウンロードして必要事項を記入し、右記の申込時のEメールにレジュメとあわせて添付してください。補助の可否と補助額は発表の採否と同時に連絡します。

2024年度書学書道史学会例会のお知らせ

今年度の例会は、7月7日（日）午後にオンラインでライブ配信として開催します。例会への参加は無料です。プログラムは以下のとおりです。

- 13時30分 理事長挨拶・趣旨説明
- 13時35分～15時05分 研究発表
- ①13時35分～14時05分 「清代『版刻書法』の書風に関する考察 澁澤版刻刊記を中心に」 李 瀟（兵庫教育大学連合大学院博士課程）
- ②14時05分～14時35分 「久松真一の禅芸術思想と森田子龍・井島勉の思想を念頭に」 林 淳（京都文化財団主任）
- ③14時35分～15時05分 「『季刊 書之美』の刊行にみる有田光甫の評論活動」 栗本高行（京都芸術大学非常勤講師）
- 15時10分～16時45分 講演

「現代日本の書」ヨーロッパ巡回展（一九五五年）について
—アーカイブ資料から見る欧州と日本の芸術交流—
ユージニア ボグダノワ・クンマー氏

（セインズベリー日本藝術研究所）
※日本語による講演です。

※注記

大会の発表者については、学会誌『書学書道史研究』第35号への投稿申込があったものとして扱われますので、改めて学会誌への投稿申込を行う必要はありません。
・学会誌への論文投稿締切は、令和7年3月31日となっております。投稿後、原稿掲載の採否は論文査読委員会によって決定されます。

お問い合わせ先

書学書道史学会事務局
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
パレスサイドビル7F（株）毎日学術フォーラム内
TEL:03-6267-4550 FAX:03-6267-4555
メールアドレス nat-styogaku@navi.jp

企画局

◆講師紹介

ユージニア ボグダノワ・クンマー氏

セインズベリー日本藝術研究所講師、イースト・アングリア大学講師。ハイデルベルク大学で博士号を取得の後、スミソニアン博物館のフリーア美術館等においてポスドク研究員を歴任し現職。専門は日本の戦後美術、東アジアの近代書道史。著に『Bokujinkai : Japanese Calligraphy and Postwar Avant-Garde（墨人会：日本の書道と戦後前衛）』（Japanese Visual Culture Series 19, Leiden and Boston: Brill）があり、論文は『About the Concept of Blank Space Yohaku in Japanese Avant-Garde Calligraphy and Euro-American Abstract Painting（戦後の日本前衛書道と欧米抽象絵画における余白の概念について）』（『書之美』の伝統と変容）三三社、2016）の他、多数。

◆申込方法

6月30日（日）までに、下記のURLまたは二次元コードからアクセスいただき、必要事項を入力の上ご送信ください。
例会の前日までに、参加のURLと資料等をお送りいたします。

<https://forms.office.com/r/a4hQDIW7FK>

皆様の参加をお待ちしております。

2024年度書学書道史学会例会 参加
申込フォーム



① 清代「版刻書法」の書風に関する考察 — 瀋陽版刻刊記を中心に —

李 瀟

版刻書法とは、手書きの筆跡を板木に刻したものである。刊記とは、原本の出版年月、出版地、出版者名等を記した部分の総称である。また、特に別丁に記されるものを奥付と称している。

清代の版刻書法の研究は、従来においては、版本の鑑定と分析などの目錄学的な研究が中心で、書肆における版本の生産状況を検討し、書籍制作の工程を分析するなかで、版刻に用いられる書体及び書風に関する論及はこれまで十分ではなかった。瀋陽鎮は中国江西省撫州市金溪県に位置する村落であり、南宋から現在まで千年以上の歴史があり、清代において書籍の重要な生産地となり、清代四大出版中心の一つとして称されている。ここで出版された書籍は近隣地域だけでなく、北京・南京・四川・武漢など、全国に広く販売され、更には日本にまで輸出されている。また、瀋陽の版刻文字に見られる書法は、宋元明時代からの伝統的な書風の影響を受けながらも、清代特有の風格を持つていたことが注目される。特に清代中期には金石考証の風潮が高まり、金石書法を版刻文字に生かした書籍が多く刊行された。例えば、清中晩期両儀堂刻本『左伝文解』6巻は、瀋陽版刻書法に初めて登場した碑学派の書風である。

本発表では、『藻麗卿嬢・瀋陽書坊版刻図録』（2018年）の内容を踏まえつつ、『江西省出版誌』や『金溪県誌』などの地方文献を参考にし、フィールドワークを実施し、瀋陽および周辺地域で刊行された清代の書籍を調査し、瀋陽の書肆における版刻書籍目録を整理し、瀋陽版刻が形成された経緯と版刻の文字の歴史的な変遷について解明を試みる。これらの調査研究に基づき、『瀋陽書坊版刻図録』掲載の版刻との比較を通じて、楷書、行草書及び篆隸書の3つの視点から瀋陽版刻書風の変容を明らかにし、清代書字や書籍の流通の研究に対する意義を検討していきたい。

（兵庫教育大学連合大学院博士課程）

② 久松真一の禅芸術思想と森田子龍 — 井島勉の思想を念頭に —

林 淳

近年、戦後日本の前衛的な書を取り上げた研究がますます増えている。特に最近のものでは、向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム』（三元社、2022年）、尾崎信一郎『戦後日本の抽象美術』（思文閣出版、2022年）、そして拙著『いびつな「書之美」』（森話社、2023年）といった研究が挙げられる。向井は現代書の視点から前衛書を論じ、尾崎は絵画を主軸に前衛書にもアプローチし、発表者は伝統的な表現の立場から前衛書の分析を試みるなどそれぞれの基準は異なるものの、森田子龍（1912～1998）を注目する書家に挙げる点で共通している。

評価の基準が異なるこれらの研究が共に森田を取り上げるのは、その思想や制作に各々が注目するものを見出すからであるが、その背後に美学者の井島勉（1908～1978）や禅学者の久松真一（1889～1980）を挙げる点においても各研究は共通する。しかし、森田の発言の分析に重きを置き過ぎ、実際の作品でその思想がどう展開されているかの考察にまで踏み込んだ研究は少ない。この状況の中、先に挙げた拙著では、「表象性」をキーワードとする井島と「無相の自己」をキーワードとする久松の芸術思想を整理し、森田の制作自体は久松でなく井島の思想がベースになっている旨指摘した。

これは全く新しい指摘というわけではなく、栗本高行が『墨痕』（森話社、2016年）で部分的に示唆したことなのであるが、その思想と作品双方の分析によって説得力を与えた点で重要と考えている。ただし、森田がその制作思想において久松に強く影響を受けたことは本人も述べている事実であり、森田の中で井島と久松の思想がどう消化されていたのかについては拙著でも触れなかった。そこで本発表では、この点について井島の思想を念頭に、特に久松の思想を再確認しながら考察する。

（京都文化財団主任）

③ 『季刊書之美』の刊行にみる有田光甫の評論活動

栗本 高行

有田光甫（1918～2015）は、1950年代以降、兵庫県西宮を拠点に書道評論の活動を行うとともに、書壇の内外で活躍する人物や海外の日本美術研究者たちとの広範な交流関係を構築した。1974年からは、その豊かな人脈を活用して得られた研究の成果と議論を発表する媒体として『季刊書之美』を編集発行し、一般市民と書について幅広い意見を交換する「書之美研究会」の運動を21世紀初頭まで展開した。本名の「有田國夫」名義での研究発表歴を持つ、書道書道史学会の旧会員でもある。長年にわたる評論活動の成果は、『書の表現構造』（1985年）と『近代日本の書論の展開』（1999年）に結実している。いずれも雑誌、紀要、新聞、図録といった各種の媒体に寄稿したテキストを編んだものであり、初出の内訳を見ると、『季刊書之美』と『墨美』の2誌からの再録が過半を占めている。

『墨美』の編集と出版を手がけていた森田子龍が墨人会の創立同人であったことからうかがい知れるように、有田の交友や研究の対象として、他にも井上有一や江口草玄、篠田昭二といった同会の有力作家たちを挙げることもできる。また、草創期の墨人会の良き助言者であった、井島勉や久松真一のような学者が書芸術をめぐって展開した思索についても、彼は関心を深めている。特に前者の「書の美学」に関しては、戦後まもなく聴講生として京都大学に内地留学した時点から、受容の素地が準備されていた。井島勉への私淑は、書道評論家としての思想形成を跡付けるうえで重要な因子である。

本発表では、戦後書の世界観の一断面を形成した、墨人会と井島美学を中心とする作品群や言説が有田の執筆活動に与えた影響に鑑みながら、『季刊書之美』の特集記事のラインアップと内容を分析する。そして、日本の書の研究史に対して彼のテキストが持つ意義を、総合的な観点から検証したい。

(京都芸術大学非常勤講師)

講演

「現代日本の書」ヨーロッパ巡回展（1955年）について
—アーカイブ資料から見る欧州と日本の芸術交流—

ユージニア ボグダノワ・クンマー氏

この講演では、1955～1956年に行われた日本書道のヨーロッパ巡回展の足跡を追ってゆきたい。この巡回展は東京で企画され、当初は『現代日本の書・墨の芸術・ヨーロッパ巡回展覧作品』国内展示会』として東京国立近代美術館で1955年8月に開催された。同展には日本側から選ばれた著名な現代書家が出展し、後に日本政府の支援を受けてヨーロッパ各国に遠征し、オランダ、スイス、フランス、ドイツ、イタリアで展示された。この講演では、特にオランダ（アムステルダム市立ステデリック美術館）とフランス（パリ、チュルヌスキー美術館）で昨年行われた新たなアーカイブ調査に焦点を当て、ヨーロッパのキュレーターや博物館関係者、アーティストたちが、現代日本書道の視覚的な素材とどのように関わったかお話ししたい。そして、事業遂行においても芸術史的にも重要で意欲的な展覧会プロジェクトを実現するために、個人や研究所を結ぶネットワークがどのように活用されたかについて議論する。さらにヨーロッパ各国の博物館が自国の観客に日本書道の視覚的言語をどのように提示し、解釈したかを検証する。加えて、アメリカ抽象画家のL. アルコプレーとベルギーのCOBRA会のP. アレシンスキーのようなヨーロッパのアーティストと日本の書道家の間で築かれ、発展した芸術的ネットワークにも注目する。

さらに、この展覧会の役割と影響を理解するための広い文脈として、ヨーロッパでの巡回展と、1954年にニューヨーク近代美術館で開催され、アメリカ合衆国内の複数の都市を巡回した展覧会とを比較する。この巡回展は、異なる形で作り上げられ提供されたが、北米の芸術体系にも影響を与え、ヨーロッパの芸術体系とは異なる文化的な足跡を残した。

1955年から1956年のヨーロッパ巡回展が、前例のない規模と公式支援を受けたことを鑑みると、この展覧会がヨーロッパの芸術空間に入ってから経過を理解することは、戦後のヨーロッパにおける日本書道の受容の経路や繋がりを、そして1950年代の世界的な芸術交流を形成した文化的ダイナミクスを追跡するため不可欠である。

(セインズベリー日本藝術研究所)

講演録画公開のお知らせ

理事会

本学会では、会則第4条に定める各種事業・活動を行うにあたり作成された成果物等をアーカイブし、向後の研究や業務に役立てていくこととなりました。既に、学会誌や会報などインターネットを通じて公開しているものもありますが、この度、近年の講演の録画を加え、更なる充実を図ることとなりました。現在、以下の講演がご覧になれます(ご所属は講演当時)。

- (1) 王連起氏(北京・故宫博物院研究館員)
「浅談趙孟頫在中国書画史上的作用(中国書画史における趙孟頫の役割)」
- (2) 陳建志氏(台北・国立故宫博物院書画文献処助理研究員)
「趙孟頫書法の研究史における転換点とその意義」
- (3) 宮澤和樹氏(林風舎代表取締役)
「祖父・清六から聞いた兄 宮澤賢治」
- (4) 戦畷梅氏(国際日本文化研究センター教授)
「小菟柳堂書画コレクションをめぐる廉泉と日本人の交流」

閲覧を希望される方は、保存メディアを送付いたしますので、本紙一面記載の(株)毎日学術フォーラム内事務局(メールアドレス:maf-syogaku@navi.jp、担当:北川瑞季氏)までお問い合わせください。なお、利用にあたっての規約が、学会ホームページ「アーカイブ公開」に掲載されていますので、事前にご確認ください。今後、大会・例会などで行われた講演のうち、講演者の許諾が得られたものを追加していく予定です。更なるコンテンツの充実を図ってまいりますので、ご利用くださるようお願いいたします。

本学会関連資料のご提供のお願い

理事会

本学会では、数度にわたる事務局の移動などに伴い、これまでの事業・活動に関する資料が多くは残っていない状況となっております。これまでの活動を振り返り、向後の活動に役立てるべく、会員の皆様(特に役員等を経験された方)からの資料の提供を歓迎いたします。

資料のご提供のご相談は、本紙一面記載の(株)毎日学術フォーラム内事務局(メールアドレス:maf-syogaku@navi.jp、担当:北川瑞季氏)までお寄せください。

新入会員紹介

事務局

◆一般会員

- 大橋さおり
- 西田 健(大東文化大学)

◆学生会員

- 新井唯真(大東文化大学大学院)
- 落合希美(大東文化大学大学院)
- 海藤侑里子(筑波大学大学院)
- 神垣七重(安田女子大学大学院)
- 塚田歩佳(大東文化大学大学院)
- 中井 希(大阪大学大学院)
- 西野真央(大東文化大学大学院)
- 西村美咲(四国大学大学院)
- 藤原匡代(大東文化大学大学院)
- 李 源(安田女子大学大学院)
- 李 道宇(安田女子大学大学院)
- 林 崇威(筑波大学大学院)

※令和6年1月〜令和6年4月に申請された方

第18期役員・幹事・諮問委員・選挙管理委員一覧(※は新任)

(役員)

- | | | |
|--------|------------------------|-------|
| 【理事長】 | 河内利治(大東文化大学教授) | 企画局長 |
| 【副理事長】 | 菅野智明(筑波大学教授) | 渉外局長 |
| 【常任理事】 | 富田 淳(九州国立博物館館長) | 事務局長 |
| | 尾川明穂(筑波大学准教授) | 編集局長 |
| | 萱のり子(奈良国立大学機構奈良教育大学教授) | 副編集局長 |
| | 下田章平(相模女子大学准教授) | 広報局長 |
| | 高橋利郎(大東文化大学教授) | 副広報局長 |
| | 高橋佑太(筑波大学准教授) | 振興局長 |
| | 成田健太郎(京都大学准教授) | 会計局長 |
| | 増田知之(安田女子大学准教授) | |

メールアドレス登録・確認のお願い

事務局

本学会では、会員サービス向上と郵送費の削減を目指し、電子メールの活用を検討しております。しかし、現在のところ、メールアドレスを登録されていない方も多く、全面的な移行は難しい状況です。

会員の皆様にはお手数をおかけいたしますが、本会報同封の「メールアドレス登録・確認のお願い」をご確認いただき、アドレスの修正・変更・新規登録がある場合は、指定フォームより登録くださるようお願い申し上げます。

第18期役員選挙について

選挙管理委員会

役員選挙の経過と結果

本学会選挙管理委員会は、第17期役員任期満了にともない、選挙管理規定に基づいて令和6年2月28日を投票締切日と定め、郵送による第18期役員選挙を実施しました。

開票作業は3月1日、小川博章選挙管理委員長指示のもと、選挙管理委員により、事務局のある毎日学術フォーラム会議室において実施されました。投票状況については、投票有権者数440票のうち、有効投票84票・投票率19%（第17期：95票・投票率22%）でした。開票結果を受け、同規定第6条により、以下の通り選挙選出理事10名、監事2名を当選者として確定しました。但し、当選監事の六人部克典氏と柳田さやか氏が27票同数でしたが、六人部氏が監事を辞退いたしました。また、当選理事の高橋利郎氏と小川博章氏が25票同数でしたが、小川博章氏は辞退いたしました。

【選挙選出理事】（五十音順）

- 尾川明穂 萱のり子 河内利治 菅野智明 下田章平
- 高橋利郎 高橋佑太 富田 淳 成田健太郎 増田知之
- 【監事】（五十音順）
- 丸山猶計 柳田さやか

第18期役員会等発足

第18期役員選挙の開票、当選者決定を受け、令和6年3月3日に選挙選出理事による緊急懇談会（オンライン会議）を開催し、理事長の互選と理事長指名理事10名を選出しました。これに続き3月17日に開催された新旧合同理事会（オンライン会議）において、各事業部局の分掌、諮問委員、選挙管理委員会委員を以下の通り決定し、第18期役員会等が発足しました。今期の役員・幹事・諮問委員・選挙管理委員の任期は、令和6年4月1日から令和8年3月31日までです。

【理事】

青山浩之（横浜国立大学教授）
副企画局長
小川博章（淑徳大学教授）
副事務局長

※金 貴粉（国立ハンセン病資料館学芸員）

中村史朗（滋賀大学教授）
副企画局長

永由徳夫（群馬大学教授）
副編集局長

鍋島稲子（台東区立書道博物館館長）
副渉外局長

福田哲之（島根大学特任教授）
副振興局長

六人部克典（東京国立博物館研究員）
副会計局長

矢野千載（盛岡大学教授）
副事務局長

弓野隆之（大阪市立美術館主任学芸員）
副渉外局長

丸山猶計（大東文化大学准教授）

柳田さやか（東京藝術大学専門研究員）

【幹事】

企画局 川畑 薫 ※草野 剛 劍持翔伍

渉外局 山口恭子

振興局 権田瞬一 ※春田賢次朗 峯岸佳葉

編集局 角田健一 ※仲村康太郎

広報局 井田明宏 金子 馨 正岡知晃

会計局 藤森大雅 村田 萌

事務局 ※佐藤汰一 野中直之 ※長谷川智

来司信博

【諮問委員】

安達直哉 押木秀樹 下野健児

神野雄二 杉浦妙子 高木厚人

名児耶明 信廣友江 宮崎洋一

【選挙管理委員会】

委員長 小川博章

委員 高橋佑太 六人部克典 柳田さやか

委員 亀澤孝幸 野中直之

（以上、理事・監事枠より4名）
（以上、会員枠より2名）

各局報告

◆企画局

今年度の大会は、大東文化大学を会場に、初日にシンポジウム、2日目に記念講演を企画いたしました。会員各位には、積極的にご参加いただきたく、また研究発表にも奮ってご応募ください。なお、7月の例会は、昨年同様にオンラインのライブ配信により実施いたします。戦後の前衛書を研究されているユージニア・ボグダノワ・クンマー先生がイギリスより講演くださいます。こちらにも本会報3ページの要領で是非ご参加ください。(局長 菅野智明)

◆渉外局

学会誌33号のJ-STAGE登載
令和5年10月31日刊行の『書学書道史研究』33号(2023年)を本年3月31日に独立行政法人科学技術振興機構(JST)運営のJ-STAGE(ジェイ・ステージ)で公開し、本学会のホームページにてお知らせいたしました。今号には論文5件のほか、特集西林昭一先生のご功勞、講演録、学界展望、書評、新刊紹介を掲載しています。どうぞご利用下さい。

WEB学会名鑑

長らく休止しておりましたWEB学会名鑑は、本年1月31日にリニューアルされたところですが、第18期の改選をうけて掲載情報を最新に更新しました。その他

奈良国立博物館で開催中の生誕1250年記念特別展「空海―密教のルーツとマンダラ世界―」、第68回国際東方学者会議のご案内を本学会のホームページにてお知らせしました。(局長 富田 淳)

◆振興局

研究促進助成金制度について

2024年度「研究促進助成金制度」による研究計画の募集を開始しました。本制度は、研究に専心できるよう諸手続を可能な限り簡便に設計した魅力的な研究助成制度です。ホームページに掲載されている「2024年度募集要項／研究促進助成金制度」をご参照のうえ、奮ってご応募ください。

学生会員研究発表旅費補助制度の新設について

2023年10月28日の理事会において、「学生会員研究発表旅費補助制度」の新設が承認されました。本学会の大会等に対面参加して研究発表を行う学生会員に対して、必要な旅費を補助する制度です。今年度の大会から運用が開始され、遠方から参加して研究発表する学生会員の旅費負担が大幅に軽減されます。本会報3ページの大会研究発表者募集要項、およびホームページに掲載されている「学生会員研究発表旅費補助制度規程」をご参照のうえ、研究発表とあわせてぜひご応募ください。(局長 成田健太郎)

◆編集局

『書学書道史研究』第34号の編集について

2024年3月末日で投稿を締め切り、第34号の学会誌刊行に向けて編集を開始しました。現時点で予定している原稿は、下記の通りです。

◇投稿原稿：本号より適用される「投稿規定」「執筆要領」に基づき、全9件の投稿に対して、チェックリストとともに原稿形式を確認し「論文」8件・「研究ノート」1件を受理しました。規定に沿って査読を進め、採択原稿は第34号『書学書道史研究』に掲載されます。

◇特集「杉村邦彦先生のご功勞」(仮題)：2023年にご逝去された杉村邦彦先生の本学会界への多角的な功勞功績を顕彰し、今後の研究への指南とするため、特集「杉村邦彦先生のご功勞」(仮題)を企画し、5氏に異なる観点から執筆いただきます。

①学会初期からのご功勞【中村伸夫氏】

②書論研究会の活動【萩信雄氏】

③日中学术交流【増田知之氏】

④書論研究等学術面【成田健太郎氏】

⑤澄懷堂美術館の創設・運営【弓野隆之氏】

◇講演録「日本の書流―法性寺流を中心に」：第33回春日井大会での古谷稔氏による記念講演録をもとに、広報局にて取りまとめた原稿を掲載します。

◇「学界展望」：2022年度～2023年度にわたる中国領域の「学界展望」について、井田明宏氏に寄稿いただく予定です。

◇「書評」もしくは「新刊紹介」：本誌で取り上げるべき書籍の推薦を随時（34号掲載分については、2024年5月中）受け付けております。複数の著作候補が届いた場合には、編集局で対象本を検討して決定いたします。

【会員の皆さまへのお願い】

編集作業の過程で会員情報が必要となる場合がございます。事務局へお届けの連絡先に変更があった場合は、速やかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

(局長 萱のり子)

◆会計局

年会費についてのお願い

本号に年会費納入用の郵便振替用紙を同封しています。年会費は、6月30日までに納入ください。なお、令和6年3月現在、会費を滞納している方には、本年度分に滞納年度分を加算した金額が記載されております。速やかに全額をご納入ください。

また、3年以上滞納の方は、すでに導入されている「長期会費滞納者の自動退会(除籍)制」の適用対象となります。ただし、退会(除籍)適用対象者となった場合であっても、退会届提出の年度分までの合算額における学会費の請求権は消滅しません。本件に関して、会員台帳別表にて管理の上、適宜納入請求を続けることが総会にて決定されていますので、予めご了承ください。

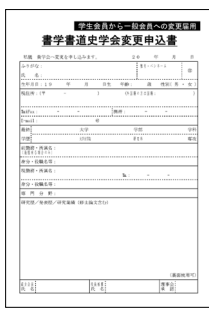
なお、海外在住の会員の方は、クレジットカードによる年会費の納入が可能です。クレジットカード決済を希望される方は、本紙一面記載の事務局までご連絡ください。

(局長 増田知之)

◆事務局

修了などにより学籍を離れた方へ

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。「会員変更申込書」の提出により一般会員資格の付与などが行われますので、今春に学籍を離れた方は必ず提出ください。「会員変更申



込書」は、学会ホームページからダウンロードできます。

なお、「会員変更申込書」下の「紹介会員氏名」「役員推薦氏名」「理事会承認」各欄の記入は不要です。書類送付やお問い合わせは、本紙一面記載の事務局までお願いします。

令和6年度事業・活動計画(案)

本来ならば総会で承認を得るべきものですが、現段階での予定としてここに告示いたします。変更等の可能性もありますので、ご留意ください。

4月21日 第1回理事会(オンライン会議)

5月15日 第47号《会報》発行及び発送

6月1日 「研究促進助成金制度」申請受付(～7日)

6月30日 第34回大会発表申込締切

7月上旬 令和5年度決算会計監査

7月7日 第1回常任理事会(オンライン会議)

8月下旬 2024年度例会(オンラインライブ配信)

9月下旬 第2回理事会(メール会議)

10月26日 《大会最終案内》《大会レジュメ集》発行及び発送

10月27日 第3回理事会(定例)(大東文化大学板橋校舎30321室)

10月27日 令和6年度総会(大東文化大学板橋校舎多目的ホール)

10月31日 第34回大会1日目(大東文化大学板橋校舎多目的ホール)

10月31日 第34回大会2日目(大東文化大学板橋校舎多目的ホール)

12月下旬 第34号『書学書道史研究』発行及び発送

12月31日 第4回理事会(メール会議)

1月15日 第35号『書学書道史研究』投稿申込締切

2月28日 第48号《会報》発行及び発送

3月23日 2025年度例会発表申込締切

3月31日 第2回常任理事会(オンライン会議)

3月31日 第35号『書学書道史研究』投稿原稿締切

(局長 尾川明穂)

追悼 杉村邦彦先生



蘭亭書法博物館にて
(2019年5月)

書学書道史
学会の設立
発起人の一人
で、長く斯界
の発展に尽力
してこられた

杉村邦彦先生が、2023年11月22日に逝去されました。杉村先生は、1939年大分市にてご出生、のち1958年に京都大学文学部に入學、東洋史学を専攻され、1967年に同大学院博士課程を修了されました。その間、学内では宮崎市定、吉川幸次郎、また学外では神田喜一郎、中田勇次郎といった錚々たる諸碩学から親しく指導を受けられ、さらに内藤湖南によつて築かれた「京都学派」の書学の伝統をよく継承されました。その後、1971年に三重大学専任講師として着任されて以降、同助教授、1975年からは京都教育大学にて助教授、同教授となられ、2003年の定年退官後は、2010年まで四国大学教授として奉職されました。

また、三重大学ご在任中の1972年4月に、「書と書をめぐる文化の総合的研究」を目的に掲げた書論研究会を創設、同年8月には研究雑誌『書論』を創刊されました。杉村先生は創設当初より会長として本会を主宰され、また書論編集室主幹としても一切の業務を担つてこられました。本会は「書論」の名を普及し、書学研究の裾野を拡大するとともに、日本書学の水準を海外に示すことに確かな役割を果たしてきましたが、誠に残念ながら、先生の会長職ご辞任ののち、2022年に半世紀に及んだ歴史に幕を閉じました。

杉村先生はこのほかに、文部省内地研究員・同長期在外研究員、本学会副理事長、澄懷堂美術館学術顧問、四国大学書道文化学会会長、関西大学客員教授などの要職を兼ねられました。このような教育・研究双方にわたる旺盛な活動や優れた人材の育成といった、学問研究の進化発展における長年の多大なご功績が評価され、1998年に蘆北賞、2011年に立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞を受賞、さらに2019年には瑞宝中綬章を受章されました。

杉村先生の学問上のご業績については、主要な論考をまとめられた『書苑彷徨』第1〜3集、『墨林談叢』、『書学叢考』、『書学論纂』のご著書計6冊をはじめ、編集雑誌として『書論』全46号（なお全てが特集号）、責任編集として『書の基本資料』全19巻、澄懷堂美術館特別展観説書などが挙げられます。またほかにも、解説・解題、辞典・事典の項目執筆、訳註・釈文、書評、隨筆などあり、まさに枚挙に暇がありません。その対象も、日中古今の幅広い分野に及んでいます。試みに最後の論文集となった『書学論纂』を取り上げてみると、「中国の書人と法書」「中国書論史研究」「近世・近代日中書法交流史」「日本近代学人の翰墨世界」「先師・先学」の5部で構成されており、これらが先生のご業績の主要分野を端的に示しているといえます。このような多様な分野について、文献のみならず種々の資料をくまなく渉猟され、多角的かつ複層的な視点のもと、精緻な分析と考証による説得的な論証を積み重ねてこられたのです。

また、如上の学問研究上の足跡は、杉村先生自身のお言葉を借りれば、「書とそれを取り巻く文化を通しての人間の探求」、すなわち「人間学としての書学」への志向（『書学論纂』自序）という一貫した学問的態度によつて打ち立てられたものです。先生のご業績を一瞥しても、書作品そのものだけでなく、書人の人間像や交友関係まで仔細にわたつて論及されており、換言すれば人と書と

を兼ねて論じることには注力されてきたかがよくわかります。つまり、杉村先生は、書を愛するとともに、書を愛する「人」を愛した研究者であつたといえるでしょう。

さらに特記しておきたいのは、杉村先生は、文部省編『高等学校芸術科書道指導資料・理論編』起草委員として、従来なかつた中国の書論に関する項目を初めて執筆されたこと、また日中通じて初の「中国書法史を研究するための入門書」である『中国書法史を学ぶ人のために』を編集されたことです。そこには、「人間にとつて最も総合的な表現分野」であり、「窓口はたとえ狭くとも、これほど奥行きが深く、広大にして肥沃な人間学へ向つて開かれている学問分野」（『書学叢考』自序）たる書について、新たな分野を切り拓き、確かな方法論を若い世代に伝えたいという強い希い、すなわち後進の育成を通じて斯界のさらなる発展への熱意があつたのではないかと思っております。

杉村先生はそのお人柄もあつてか、書学研究者や書家、また在野において書を愛好し探究する様々な方々との、実に幅広い交友関係をお持ちでした。このような書を介した交流は日本にとどまらず中国にも及び、幾度となく国際シンポジウムに日本を代表する研究者として招聘され、そのたびに海外の書学研究者に向けてご研究成果を発信されました。また近年では、『書論』誌に中国人研究者の論考を積極的に掲載するなど、学術面での日中書法交流を実態として進められていました。その矢先のご逝去であり、かえすがえす残念でなりません。

以上述べ来たものは、先生が残された偉大な足跡の一部に過ぎません。杉村先生との「翰墨の縁」とご生前に賜つた有形無形のご学恩に対し、改めて満腔の感謝の意を表するとともに、衷心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（増田知之）



文字画像データベースと字典

尾川 明穂

インターネットで利用するものでは書道字典アプリが一般的かもしれませんが、一方で筆書やそれに由来する文字の画像データベースが研究者・機関によって公開されており、文字検索のほか、ディープラーニングによる解読サービスも提供されています。専門ではないのですがいくつかを挙げさせていただきますと、文字検索できるものでは、

- ① 奈良文化財研究所ほか「史的文字データベース連携検索システム」
 - ② 人文学オープンデータ共同利用センター「くずし字データベース検索」
 - ③ 人文学オープンデータ共同利用センター「篆書字体データベース検索」
 - ④ 京都大学人文科学研究所「拓本文字データベース」
 - ⑤ 台湾・中央研究院ほか「小学堂文字学資料庫」
 - ⑥ 香港中文大學「漢語多功能字庫」
 - ⑦ Jervon「開放古文字字形庫」
 - ⑧ 北京師範大学「漢字全息資源応用系統」歴代字形図集
- などがあり、篆書・草書資料の読解や、歴史的に用いられた字体を確認するのに便利です。また、①の連携先である台湾・中央研究院「簡牘字典」や④⑤⑧には手習いの対象とされる名品も含まれており、書作の際の参考にもなります。ディープラーニングによる解読サービスには、
- ⑨ 人文情報学研究所「篆字画像検索 (AI篆字認識)」
 - ⑩ 人文学オープンデータ共同利用センター「みを (Mi.WO) - AIくずし字認識アプリ」
 - ⑪ 「AI手書きくずし字検索」

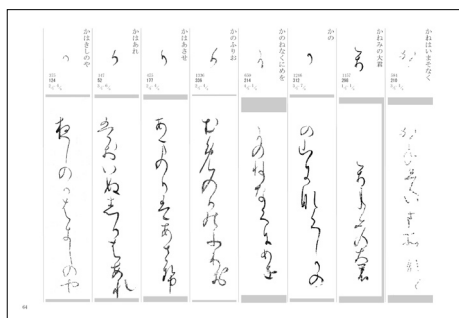
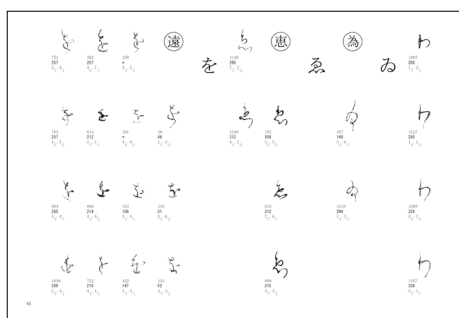
などがあり、特に⑨は江戸時代の印文を読むのに重宝しています。

ただ、書学書道史を志す者として書風の研究に活用しようとした場合には、もう少し違う要件を備えたデータベース——例えば、特定の書人・書跡を悉皆的に扱ったものによる必要もあるかと思えます。紙の字典においては、近年も鄭曉華主編『中国行草書鑑定字典大系』全10冊（上海辞書出版社）など多く刊行されていますが、各字例の出典が明記されているものは同大系以外にあまり見られず、採録元や縮尺の確認が難しいという悩みもあります。

以前、学部生のときに、大迫正一先生（現・安田女子大学教授）のご指導のもと、データベースソフトのファイルメーカーによって「寸松庵色紙」の字典を作製したことがあります。現存する色紙すべて（1363字）を収録したほか、字径に差があることから原寸で表示できるよう配慮し、また連続の特徴を見るために、任意の字から行末までの釈文によって一行分の図版を配列したものも作りしました。これは做書や想定復元に用いただけでしたが、字の大小による字形の違いや、実線の曲直と連続との関係がわかり面白く思いました。その経験は、現在取り組んでいる執筆法に関わる考察にもつながっています。

以下は妄想ですが、いつかは名跡のほとんどを収録した原寸文字画像データベースが作製できたらと思っています。その場合は、上掲データベースの多くが加わっている International Image Interoperability Framework (IIIF) にも対応し、博物館・美術館の所蔵品データベースとも連携すべきかと思えます。課題は多いかもしれませんが、

多様な字形や筆線を見つめることによって手指の繊細な動きが明らかに、毛筆芸術全般への理解も進むのではないかと考えています。



私家版『寸松庵色紙字典』（2005）部分

談話室

台湾の国立歴史博物館の再開

沈 伯陽

2月21日、台湾の歴史博物館が約5年半ぶりに再開した。王長華館長によれば、博物館は過去6回の改修工事を行い、今回の工事で全ての補強を終えたという。

リニューアル記念の特別展は非常に充実したもので、中国と台湾における芸術の脈絡がうかがえるものとなっている。1階と2階の特別展「筆墨豊碑―史博物館蔵之書画重宝」では、精選した所藏品200点余りが展示され、于右任・溥心畬・張大千・黄君璧・林玉山・傅狷夫ら6人の巨匠の作品を中心に据えて展示している。なかでも、于右任84歳時の『国立歴史博物館建館記』は、八聯屏の草書の巨作で、代表的な傑作と思われる。

このほか3階には常設展があり、青銅器や唐三彩など河南の文物のほか、戦後、日本から返還された文物も展示されている。蟠龍方壺、獸形器坐、金柄銅短剣などの国宝もあり、歴史博物館のコレクションの豊富さには驚かされる。

初心としての「寅さん」と肥後守

丸山 猶計

映画「男はつらいよ」(第47作、1994年)のワンシーン。就職して仕事に慣れ始めた甥の満男が、伯父の寅次郎に「仕事がつまらない」とボヤク。熟練のテキヤである寅次郎は、鉛筆の売り方を通して、商いの心を甥に感得させてしまう。あざやかに「啐啄同時」に持つ込むこの場面は、教員歴の浅い私の永遠の憧れだ。

寅次郎が母の思い出に語る、肥後守で鉛筆を削ってくれた話をヒントに、ある授業で、肥後守で削った鉛筆を全員に握らせ、トレーシングペーパーに古筆切の臨模をさせた。すると、学生たちは鉛筆の予想以上の書き味に驚きつつ、精彩ある筆致を展開してくれた。この肥後守は、刃先の維持に砥石が不可欠な点が硯に重なり、水を介する点も一緒だ。カッターは墨液に比せられ、小刀と毛筆は近似する。原点回帰による発見だ。

文化財から人に職務の重心は移って、書という軸をさらに大切にしたい。

「皇室のみやび―受け継ぐ美―」展

山田 千穂

三の丸尚蔵館に勤務して2年が過ぎました。当館は平成元年に上皇陛下と香淳皇后により、昭和天皇まで代々受け継がれ「御物」と称されてきた品々の中から国にご寄贈されたことを機に始まりました。昨年11月に開館30年を迎え、名称も新たとなった「皇居三の丸尚蔵館」の開館の節目に立ち会えたことを、たいへんありがたく思っております。

開催中の「皇室のみやび」展は、当館を代表する収蔵品を紹介するものです。その最終章の第4期：5月21日(火)

より6月23日(日)まで、書跡作品では「粘葉本和漢朗詠集」を展示予定です。広く書に関心を持っていただけるよう、努めてまいりますので、なにとぞご教導のほどよろしくお願い申し上げます。

拙政園の紫藤花

李 源

毎年4月、蘇州に住む叔母が、私に拙政園の紫藤花の写真をシェアしてくる。この紫藤花は明代の呉門の名家、文徵明先生が自ら植えたものである。この花を見ると、文先生を初めて知った時を思い出す。

当時学部2年生で、小楷を学び始めたばかりで、しばらく経ってから、老師は自由に手本を選ぶように指示された。「南華経」を見たとき、他の手本を習う気が失せた。63歳のときに書いたことを知ってさらに驚いた。筆法は力強く、結構は端正である。深く学んで、このスタイルで制作した小楷作品は、学内外の展覧会ですべて優れた成績を収めた。そのため、文先生に深い感情を抱くようになった。

叔母が写真を送ってくれたたびに、感謝の気持ちでいっぱいになる。おそらく文先生のおかげで、紫藤花はいつも文人の雰囲気を感じ出している。文先生が、500年後に自ら植えた紫藤花が依然として豊かに咲き誇っていると感嘆することでしょう。

編集後記

◆日本の出版不況とは対照的に大陸では書に関連する出版物の刊行が盛況です。影印本についても、日本の『書跡名品叢刊』を意識したであろう『中国碑帖名品』は約1年前に二編が刊行され、全140冊となりました。『書跡名品叢刊』を超える日もそう遠くないように思われます。(高橋佑太)

◆この度、広報局幹事を拝命しました。微力ながら尽力して参りますので何卒よろしくお願いいたします。昨年は中国、台湾に訪れる機会を得ました。新型コロナウイルス感染症の流行後、初めてとなる海外に胸が高鳴りました。この刺激を研究に反映させたいと思います。(藤森大雅)

◆今期も本誌編集作業に携わることとなりました。引き続き微力ながら務めさせていただきますのでご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。去年卒業した教え子が進学先で書道部に入ったと報告しに来ました。選択科目でやった書道が楽しくて入部したとのこと。新学期早々嬉しい報告でした。今学期も少しでも書道に興味を持ってもらえるような指導が出来るよう研鑽に励もうと思えます。(村田 萌)

◆例会や各種制度の充実を反映して、47号は頁数を増やしています。新体制となって2期目、事務局を中心に業務は複雑化・多忙化しています。例会や大会、論文投稿など、学会活動に是非ご参加ください。(高橋利郎)